

寺
ごよみ

一 月

一 日 修正会・年頭参り
三 日 お寺の学校かるた会
栗虫助成会

四 日 栗虫・報恩講

一〇日 雪ん子劇団初げいこ

御正忌報恩講

一三日	昼一時	速夜
一四日	昼一時	速夜
一五日	一一時	お講・下村
	昼一時	速夜
一六日	七時半	初夜
	一一時	お講・浦山
	昼一時	満座
布教	三寄	靈証 師

一七日 十七夜偈ぶ会
一八日 花の会新年会
二二日 花の会歌舞伎観劇
三〇日 雪ん子劇団砺波公演

寺 報
善 巧

発 行
〒 938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山 497
白雪山 善 巧 寺
TEL・FAX (0765) 65-0055
TEL オテラザ 65-0975

みほとけの光あふれて
いのちまいにちあたらしい
今年もよろしく



下記の大瀬戸さんの故郷・浦山新から眺めた初日の出

大瀬戸幸子さんは、浦山の善巧寺の門徒の家に生まれた。縁あって広島島の呉に嫁いで五十年になる。嫁ぎ先の呉の広といふところは安芸門徒と呼ばれる人たちの在所が集まっている。

善巧寺の僧侶とならび称される学僧であった、石泉派の僧叔師もその昔この広に住まっていた。その遺徳であろうか、瀬戸内海に面したこの地方で、平成の今でも、毎月十六日の親鸞聖人の御命日は「お速夜」と称して、漁師も魚屋も休みになるのである。幸子さんは、その在所の有り難い大瀬戸ミエさんというお同行に乞われて、大瀬戸家の嫁になったのである。

昭和二十年、幸子さんは二十二才だった。新婚第一夜、姑となったミエさんが幸子さんに頼んだことがある。夕方の正信偈のお勤めが終わった後、お導師の席に幸子さんを座らせて、下座に座った姑のミエさんが、頭を下げてこういう。

「御意見うけたまわりました」
どうすれば良いのか分からぬ幸子さんに、ミエさんは一枚の紙を渡した。そして、これを私に読んで聞かせて欲しいと頼んだのである。そこには、次のよ

ご意見承りましょう

うに書いてあった。
「念仏行者のたしなみは
第一我が身をつゝしめよ
なるべくアゴをば動かすな

△中略△

家に波風おこるのも
言葉が先で手がつくぞ
言葉の上より掴みあい
後には命も失うぞ
つゝしむべきは口なるぞ

南無阿弥陀仏のみ仏が
出入りします門なれ
ば
戸口の締めりがかんじ
んぞ」
聞き終わったミエさん

は
「ご意見有り難う御座い
ました」
と深々と頭をさげる。こ
れが、ミエさんが亡くな
る日まで、四十数年間、
続いたのである。

意見を云って聞かせるのでは
なく、自分が聞かせて貰うとい
うこの素晴らしさ。

ミエさん亡き今、幸子さんは、
暗記してしまつたこの「ご意見」
を頭の中で繰り返しながら、お
念仏に会えた喜びを噛みしめて
いる。善巧寺の若はんの法友で
もあつた幸子さんは、今年も浦
山に帰る日を楽しみにしている。

常見寺住職 利井明弘



空華忌講話

——(最終回)——

行信教教授

あぐる 騰

ずい 夢 師

このご本典と略典とご和讃と、この三つの中どれをみても同じものと、ちよつと変ったところがあると思うのです。

みなさん、この三つにどれにもある言葉はどれでしょうか。お気付きになりませんか。みなさんから言ってもらおうということは大事な事なんです。わたしはねえ、この宗教というものは、聞いてるだけになるほどな、ようわかった、というのは宗教にはならんと思うんです。「あつ」と感ずることが、これが信心なんです。そういうことの訓練のためにも、今、質問しているのです。初めて聞かれた方もあるかもしれませんが、けれども、どうですか。

親鸞聖人のご法義は、ちよつと言葉が変わったりしていても、根本的には、きちつと大事な所が整っているんです。これを心

得ておきませんと、信心というものもぐらついてきます。だから大きな声で言ってみてください。ここにも同じ言葉、これも同じ言葉、これも同じ言葉がでてるなど。

それは往相、還相これですね。この言葉は、三つのお聖教のどれにも揃っていますね。

「浄土真宗を案ずるに二種の回向あり、一つには往相、二つには還相なり」とありましよう。「本願力の回向に二種の相あり、一つには往相二つには還相なり」これも同じこと、「南無阿弥陀仏の回向の恩徳広大不思議にて、往相回向の利益には還相回向に回入せり」と、どれにも往相還相がある。

ご本典には往相回向から「教行信証」と、だしてあります。略典は「教行信証」の一番大事なこと、[因]これをだし

である、大行、浄信と。これは教と証がいらんというのではなくて、一番大事な所をぬきだして、これさえ踏まえておけば、自ずと証果はあらわれるからです。如来様の与えてくださった白道と正しくふみしめているのが、行信でありますから、行きつく処の証果は、お浄土参りと必然的に決めてくるということであります。

私はここへ来たのは初めてでございましたので、どこで降りて、どうしたらいいのかなと心配していましたが、坊守様が、ちゃんと切符もとって電車も指示して、いろいろ教えてくださったので、その電車に乗って来たんです。そうしたら間違いないここへ来たんです。よく心得た人の指示に従って、その道さえちゃんと間違いなく確かめて乗っておりましたら、来たんです。お浄土まいりも同じことです。みなさん、チャーんとお浄土に参る道を踏みしめて行きませんことには、我々、どんな所へいく道を歩んでいるのか、それもわからぬままに年月をおくっているのが私であります。それを見抜いて、ちゃんと如来さまが乗り物をあつらえて、迎えに来て下さっておりますから。ご存知でしょ

うか。その乗り物に乗っておればいいですよ、お浄土参りの乗り物に。それは何かと言ったら、南無阿弥陀仏これなんです。行なんです。如来さまのあつらえて下された乗り物ですから大行なのです。大乗なのです。これがお浄土参りの乗り物なんです。これは向こうからチャーんと授けて下さっているんです。阿弥陀さまが本願力回向と。わたしはまだ向こうには行っていないですけど、この乗り物が、如来さまに聞いたら、間違いのない、私が保障するとおっしゃってくださるから、親鸞聖人の信心が決定したんです。その乗り物は誰がくださったかというのは、直接は法然上人からあてがえられた。先程正信偈の中で、ずっと七高僧が全部あがつておりましたでしよう、「法蔵菩薩因位時」のところでは、おしゃかさまの教のことをおっしゃってました。次は行のところ「印

度西天之論家」から七高僧がならんでおられる、そして最後に「唯可信斯高僧説」と、正信偈の中に、教・行・証が全部おさまっています。そこをたしかめてもらいたいです。

その中の行、「ナムアマミダブツ」という如来さんにあてがわれた乗物に今乗ってますよ、ま

ちがいない行きますよ、どんな形で死にましようとも私はお浄土まいりまちがいございませんというご法義をちゃんとあらわして下さっているんです。

「恩徳広大不思議にて…」のご和讃では、行・信も教・行・信証も、略してありますけれども、ちゃんと揃っているのです。ところがちよつとちがうところはといいますと、御本典は「浄土真宗」という言葉から往相還相がわかれてます。略典では「本願力回向」という言葉から往相還相とわかれてます。ご和讃では「南無阿弥陀仏」という言葉から往相還相とわかれてます。出だしの言葉はそれぞれちがいますけれども中味は一緒ということです。この三つの言葉の中で、みなさん、一番親しいのはどれですか、「ナムアマミダブツ」ですか、何ででしょう。みなさんお正信偈およみになつて、ご和讃の前に「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と何回云われましたか。「浄土真宗」「本願力回向」ということばより「ナムアマミダブツ」の方が一番親しいのは、何度も口に出してきたからとちがいますか。

この私の口から出ているお念仏の声は「本願力回向」という言葉と同じ意味なんです。助

けたいという如来さまのお心、本願が、ナムアミダブツとして私達に回向しているということ。もつと簡単に言いますと如来さまからもらった声です。ということ。お浄土から私のところへとどけて下さっているまことの宗教ということ。親鸞聖人の前でお念仏なさっていたお師匠さま法然上人の声は、お浄土からの諸仏の声だと親鸞聖人はうけとられました。ご和讃に「智慧光の力より本師源空あらわれて浄土真宗をひらきつつ選択本願のべたもう」というのがありますが、聖人は浄土真宗ということばも、選択本願ということばも法然上人の念仏の声も、浄土から出てきているまことの声だとおっしゃっている。お前も念仏して助けられよという言葉を法然上人からさすけられました。が、歎異抄第二章のところで「親鸞においては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこらむりて信ずるほかに、別の子細なきなり」とあるように、親鸞聖人もナムアミダブツと念仏していかれたんです。それが仏さまがおまえにあうように作り上げて下された念仏なんだぞと法然上人がおっしゃっておられるんです。

法然上人は親鸞聖人とは四十才も年がちがっておられました。が、如来さまからいただいた声をうけとったということにおいては同じであると云わざるをえないのです。

昔は十人も兄弟がいるのは普通で、一番上と一番下が親子ほども年がちがっていたというのはよくあることでしたが、この一番上の姉ちゃんが母親に対して「お母さん」という声と一番下の娘の「おかあちゃん」という声はちがいますか。みなさんもここを知ってもらわなくては。親鸞聖人は八百年も前に念仏された。今日の私も聖人と同じ如来さまから回向された声で念仏申し上げているのであります。ねうちがちがうとはいえませんが、八百年前のお方はお兄さんであつて八百年後の私たちは弟であり妹であると言つてはいけません。か。

曇鸞大師もちゃんとおっしゃっています。「同一に念仏するものは斯界のうちみな兄弟となす」そのことを心得ていただきたいのです。私のいつているたつた一言のナムアミダブツという念仏は如来さまからたまわったものなんだ。

私は親鸞聖人や法然上人と同じ仏さまから同じお慈悲をたま

わっているんだ、知恵をさずかつてゐるんだということに目覚めていただかなくちゃ、この声で。そのことを信心というんだと親鸞聖人はおっしゃいましたよ。年代はちがっても同じ親からのお乳をいただいているんです。ねうちがちがうとはいえませんが、それ故に、こちらは知らぬ間に同じ身分にしあげられて下されているということに親鸞聖人が感じとられたことに、信心をいただいたとおっしゃったのであります。浄土からのまことをうけとった、ことばかえてい

えば、如来さまのみ心からちやうだいしている、如来さまの氣持が私に働いて下さっているんだ、知らぬ間にナムアミダブツというてゐるまに浄土のどまんな中にすえられてゐるんですよ、如来さまの胸の中にいだかれておるんですよ、ということを感じとつていただくようにということを広めて下さったのが親鸞聖人のご法義なのであります。浄土真宗なんです。他力回向ということなんです。ナムアミダブツということなんです。どうぞみなさん味わいとつていただきたいのであります。

(三回にわたつての講話録は今回で完了です)



赤光 白光

お寺の銘を
色んで染めた
雪のぼろが、
そいがです。

ガン告知を受けて、法座と寺報で、別れのあいさつをした松阪市の小林浩善覚寺住職の記事(本号一面)は、逸見政孝さんの『生還宣言』とは違った意味で、衝撃を持って読んだ。この記事を読んで、雪山隆弘さんを思い出した。雪山さんが遺した『ブッド・バイ』という言葉は、今や市民権を得ようとしている。大阪の寺で生まれ早稲田大学卒業後、劇団四季研究生、サンケイ新聞や夕刊フジの記者などのあと、富山県宇奈月町の善巧寺で妻の玲子さんと「雪ん子劇団」などを作り、ユニークな教化活動を展開していた。平成二年九月十七日に亡くなる半年前からサンケイ新聞に連載された「ある宗教家のガン体験」は『ブッド・バイ』(百華苑刊・八百円)の題で出版されている。たまたま、雪山さんはそのころ本欄(赤光白光)も執筆していた。同書のあとが

きで玲子さんは、「…そして九月三日、呼吸困難で緊急入院した時は危篤にちかいということでしたが、病院側のご努力でもち直し、氣にかけていた本願寺新報の最終稿を口述で書き上げたのです。やったア。終わりました。ありがとう。満足そうでした」と記している。その「赤光」が載つた九月二十日号は十七日に刷り上がった。雪山さんは、仏教界全般にまで好評のアニメビデオ「仏典物語」の創作者でもある。「仏典物語」は自ら製作に関わり、夢であつた「念仏物語」(この題も雪山さんが付けた)の構想を本願寺出版社の担当者に語り切つて逝つた。その構想を基に「念仏物語」は「ほんがんじ」「えしんにさま」「歎異抄」が出て、いま「蓮如さま」の製作が進んでいる。発売される毎に、玲子さんは善巧寺の寺報に大きく取り上げてゐる。生死を超えた世界を教えて下さる同朋が、私の周りにたくさんおられる。

(新報11月10日・赤光白光より)

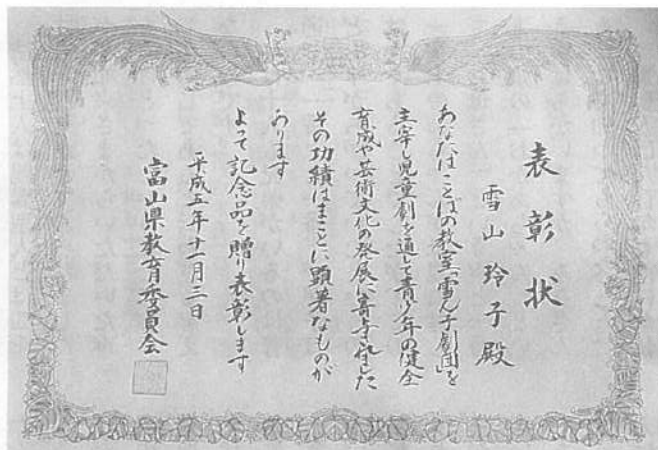


晴れの表彰

永年、町政の発展に貢献した功績と労苦に対して、雪ん子劇団が、宇奈月町教育文化功労者表彰を受けました。さる十一月二日、役場で表彰式が行われ、六年生の有馬聡子さんが劇団を代表して賞状と楯を受け取りました。

また、同日午後二時から県庁四階大ホールでは、富山県教育功労者の表彰式が行われ、優良芸術文化活動推進者として、若坊守が表彰をうけました。

四年前のこの日、若院隆弘が県教育功労者表彰を、若坊守が県芸術文化協会表彰をうけ、大いに喜び合ったことが、まざまざと思い起されます。左の絵葉書は夫婦揃っての受賞のよろこびを、隆弘が東京の長女に知らせた時のものです。この葉書は、現在、門徒会館の入口ロビーの隆弘の写真の前に賞状と共に並べて飾られています。



**教育文化功労
ことばの教室
「雪ん子劇団」**

多年にわたり、子ども演劇活動を通して地域児童を明るく心豊かに育てることを目標に、県内外で数多くの公演を行い、青少年健全育成のために貢献されました。



(広報うなづきより)

町功労者表彰の 門徒の方々



・佐々木次正さん (音沢)
産業経済功労
(前列左から三人目)
・野崎寿美子さん (愛本)
厚生事業功労
(写真前列右から二人目)
・岡田実さん (熊野)
防災功労浦山地区消防協力隊代表
(前列右はし)

来世紀への遺書
第三話

仏陀バイ



生前の雪山隆弘さん。背後は十萬圓のデューリップ

辺見じゅん
(作家・歌人)

癌で逝った善巧寺の「若はん」が築いた「開かれた寺」

1

合歓の花が咲いている。

今年は天候が不順だったこともあって、九月に入って花を咲かせた。

うす紅いろの合歓の花を見つけたのは、数年前の散歩の途中だった。垣根に合歓の花を咲かせる家を見つけて以来、どんな人が住んでいるのかも知らないのに、今年も咲きましたねと声をかけるようになった。

木の花は、この世における季節の便りだとうたった歌人がいる。癌で亡くなった人だが、まさに年々歳々、季節の便りとして花を届けてくれる。季節ごと

に咲く花に心惹かれるのも、自らのいのちを重ねて眺めるようになったからかもしれない。

近頃、「死生学」とか、「死生観の時代」といった言葉がいわれるようになった。死の処し方といっても、人それぞれ異なる。例えば癌の告知にだって、年齢やその人の置かれた状況によりさまざまであろう。だが、もし、私がそうした立場になったときは、知らせてくれるようにと身近な人々に頼んである。死は、やはり恐ろしい。臆病な私がどれだけ耐えられるかわからないが、せめて私なりに限られた時間を密度濃く生きたいと思うからだ。

私がそんなふうに考えるようになったのは、いろんな理由が

ある。その一つに、癌で五十歳の生涯を終えた雪山隆弘さんの死に至るまでの生き方が、影響を与えたように思えてくる。

雪山さんとは生前に一度しか会っていない。しかし、私の故郷富山のゆかりの人である。宇奈月町浦山の古刹、浄土真宗本願寺派善巧寺の若院で、土地の人々

は親しみをこめて「若はん」と呼んでいた。大阪の寺の次男坊で、新聞記者だった彼が富山に来るようになったのは、善巧寺の跡取り娘の玲子さんと結婚して七年経ってからだ。

「お寺は本来、亡くなった人たちのためのものではなくて、生きていく人が集まる場所だと思う。例えば、ハートのある公民館のような、開かれた寺にした」

雪山さんはつねづね語っていた。なによりも寺の活動は地域の人々との深い結びつきこそが大切である。そこで浦山の小生を中心にしたことはの教室「雪ん子劇団」をつくったり、大人たちのための「宇奈月夢を語る会」等、地域の文化活動に

亡くなるまで心を傾けた。

「宇奈月夢を語る会」の催しものの一つに、今年で十五年目を迎える「野休み落語会」がある。年に一度、六月の田植えが終った頃に東京から、永六輔、入船亭扇橋、柳家小三治さんらが善巧寺に駆けつけてくれる。雪山さんが新聞記者時代に知り合った永六輔さんとの縁という。昨年の三回忌を記念した小冊子「隆弘法師・雪山君・若はんへ」の追悼集に、永さんは、「夕刊フジ」時代。

「若」時代。そして「闘病」の時代。生き方と死に方の先輩です。と、愛情のこもった一文を寄せている。

「彼は面白そうだったこと、楽しいことは何でもした人でしたね。不思議なもので、やっていくうちに、夢がむこうのほうからつぎつぎにやって来るのです」

一生懸命に生きた人だと、妻の玲子さんは語る。

雪山さんは、臨終になる前、「いい人生だった。五十年、実にいい人生を過ごして貰った」と語ったそうだ。そして、妻に、「レコ、逢えてよかったな」と言った。レコというのは、玲子さんの愛称である。

娘時代の玲子さんは、内気で人前で話すことの嫌いな娘だった。寺の長女として生れたことを宿命のように思いながら、別の人生を選択できなかったものかと模索した時期もあった。学習院の独文科を卒業後、故郷に戻って北日本放送のアナウンサーを三年近く勤めた。

当時、玲子さんの上司だった稲垣隆也氏は、「アナウンサーの花形だった」と語っている。ある日、突然、玲子さんは福祉関係の仕事がしたくなり退職した。だが、漠然とした思いつきで、行動に移すまでには到らなかった。

「娘時代の私は、内気で自分をどう表現していいかわからなかった。閉ざされていた部分というか、私の中に眠っていたものを、少しずつ引き出してくれたのが彼だったと思いますね」

玲子さんは、出会って別れるまでを「二十三年三カ月と六日」と、しみじみいう。二人が比叡山ホテルのロビーで会った見合いの席から数えての歳月であった。

この文章は月刊誌「VOICe」十一月号に掲載されました。四章十四頁にわたるものですが一章のみ掲載しました。

31) 山根仁三郎(二女10・19) 本波
守(11・23) 析沢菊次郎(二男11・
30) 鬼原幸作(12・7) 橋爪梅次郎
(12・14) 橋爪市次郎(12・15) 山本
浅次郎(母12・15)

百回忌（明治二十八年寂）

佐々木又八(1・2) 高嶋彦右工門
(母2・5) 大窪宗次郎(2・8) 本
波吉三郎(2・19) 大野宗左工門
(2・20) 丸田嘉右工門(母3・30)
山浦和七(母4・5) 鬼原次郎助
(二男5・6) 山片平六婦5・19)
板川市郎左工門(婦6・27) 橋爪仁
三右工門(長男6・28) 浦滝久次郎
(7・31) 開沢依左工門(長女8・19)
谷口清右工門(8・22) 福沢五左工

門(母8・23) 川内武右工門(8・30)
谷口清右工門(長男9・2) 福沢吉
三郎(9・11) 橋爪仁三右工門(母
9・25) 佐々木宗五郎(9・25) 東
狐嘉三郎(9・26) 棚次郎右工門
(9・26) 鬼原孫十郎(母9・29) 浦
田九左工門(9・30) 野嶋又助(長
男10・1) 福沢吉三郎(妻10・3)
大藪助十郎(妻10・9) 山片平六
(妻10・19) 樗兵助(10・21) 佐々木
次右工門(婦10・24) 佐々木次左工
門(女10・31) 大島藤七(母10・31)
鬼原孫兵工(10・30) 鬼原次郎助
(11・1) 森岡安次郎(11・10) 佐々
木九郎三郎(11・20) 川内仙右工門
(11・23) 浦瀧与八郎(妻11・28)

住職はいま

入院生活ももう半年になろうとしていますが、このほど個室から六人部屋（208号）に移りました。いつも話声が聞こえるので賑やかでいゝよと言っています。お見舞いに来て下さる方にも必ず言う言葉が「毎日顔を見せてよ」。人恋しくなっているのでしょう。住職から二句

正月を迎え嬌声 部屋に満つ
病状は一進一退の三ヶ日



歳末助け合い募金に今年も参加の雪ん子たち

十一月十日から二学期末テストが始まり、今日十一月十四日はテスト最終日であった。テストを受け終って思うが、行信高校という学校は他の学校とくらべて、「テスト」の見方が、おおよそ違うように思えた。

行信教校は、テスト結果の順位を出さない。一見、とてもはりあいのないテストに思えるだろう。又は成績を気にしなくていい、気楽なテストに思えるかもしれない。実際、私も最初ははりあいのないテストだと感じた。やはり、やるからには、番数をつけてもらって、目標をつくり、上を目指したい。今まで

義務教育をへて高校に至るまでの数々のテスト

トはそうしてきた。結果がすべてであつた。人より上を目指す、人と比較して自分を見る、そういう目が自然に身につけていた。

「人と比較して自分を見る」これはテストにだけ言えることでは



だ。人と勝負し、け
おとすかけおとさ
れるか、そういう
世界だ。結局、私
はそういう枠内で
しか物事を見てい
なかつた。



先生方は、僧侶として、最低限覚えてもらいたいことをテストに出題する。それを生徒が個人個人、自分の出来るだけ、覚えるのだ。それを人と比較したところでは何になるのだろうか。自分

の問題である。だから、楽をしようと思えば、どこまでも楽にできるし、やろうと思えばどこまでもやれるのだ。

世間とは一味違つた学校に来て、新たな厳しさを教えてもらった。

さて、テストが終わり二学期
ものこすところあと一日。今日
は、今年の行信の生活でも思い
出しながら、みんなと酒でも飲
もうかな……。

浦山に帰れば、雪ん子のチャリティーショーが待ちうけている。同室の宮田さんも友情出演してくれることだし、地元の高級生でもさそってみたいと思う。

寺
こよ

二月

一日 お講・浦山

三日市・報恩講

一〇日 生地・報恩講

一六日 お講・下立

一七日 十七夜偲ふ会

一九日
下立・報恩講

二日 升昇 幸恩言

二二日 板屋・熊野報恩講

二八日

寺
こよひ

三月

一日 お講・浦山

浦山・報恩講

一五日 太子会
一六日 お講・

一七日 十七夜偈ぶ会

会

演・町文化功劳賞受賞

記念公演

拝むところに
恵まいる世界が
開ける

The blessed world becomes open
when we take refuge
in the Tathagata.



（写真：奥の院）

1 1994 平成 6 年														土 曜 日
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
2	3	4	5	6	7	8		9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22		23	24	25	26	27	28	29
								30	31					

御正忌報恩講

一三日 昼一時 遠夜
一四日 昼一時 遠夜
一五日 一十一時 お講・下村
昼一時 遠夜
七時半 初夜
一六日 一十一時 お講・浦山
昼一時 満座

布教 三寄霊証師

御正忌報恩講には必ずお参りを

「正忌は親鸞聖人のご法事です。ようこそ阿弥陀様のお救いを身にかけて伝え残してくださいましたね。そのご命日にあたって（お礼を申す）、親鸞さま九十年ご苦勞でございました、ありがとうございます。」

いま私の手元には、あなた様の書き残してくださいました「お正信偈」を頂いてあります。今こうして、阿弥陀さまのお慈悲を聞かせてもらおう身になりました。

「ここに新たに（お礼を申す）ひととき、それが「正忌」です。

大阪光昭寺住職 若林眞人師（「一味」六五四号より）

太子会

福井へお参りの旅

三月十五日
行先 福井別院
平福寺

会費 長慶寺
費 一万円

申込しめ切 三月十日

聖徳太子の遺徳を偲ぶ恒例の太子会は、昨年お寺見学に出かけて好評でしたので、今年も行うことになりました。

十七夜偲ぶ会のお経会と祠堂会にご出講の高務先生とのご縁で、今回は福井にまいります。福井別院もすぐお隣ですし、更に、善巧寺坊守の姉の嫁ぎ先である長慶寺も近いことですので、三ヶ寺におまいりさせていただきます。建設関係、総代さんに限りません。

ご希望の方はどなたでもお申込みください。

雪ん子劇団 文化功労賞受賞記念公演

三月二十七日 午後

雪ん子の今年の卒業生は女の子ばかり八人ですが、そのパワーは男の子も顔負け、チームワークも良く、下級生の良いお手本にもなっており、やる気満々のメンバーです。宇奈月町文化功労賞受賞記念ということもあってハッスルぶりは今から想像にたくありません。一年生も九人もいてこれまた愛らしいことこの上もなく。しっかりと四十人家族している雪ん子たちを応援して下さい。

「とやま物語 青春トーク」 一月十五日午後六時半・富山テレビ

今年最後のお講の日十二月十六日、門徒会館では、富山テレビの録画撮りが日が暮れるまで行われました。

これは、金沢の看護婦さん米一真智子さん（24才）、富山の手話通訳をめざしている野田ちはるさん（21才）、お寺の教化活動に励む雪山有花（25才）の三人が、それぞれの仕事にかけ思いを語り合うという青春トークで放映は一月十五日午後六時半から。

どうぞご覧ください。

合 掌

今回の表紙を飾った写真は、浦山新から望む初日の出です。カメラマンは浦山新の鬼原六義さん。初日の出をカメラに収める機会はめったにないそうです。六義さんは法名が、かの勸学、故桐溪先生と同じ釈順忍。一昨年のほんこさんでこのことが話題になり、何だか急にお寺を身近に感じたとか。

年末に中央公民館で行われた雪ん子劇団主催のチャリティーショーには、雪にもかわからずおまいりのおばあちゃん、雪ん子の家族、二十代の若者、雪ん子OGなど町内各地からつめかけてくださいました。

シンガーソングライター宮田さんは、行信教で俊隆と同室のご縁、洗足の管楽アンサンブルは、同学園教授の春日利比古先生とのご縁、そして、伴奏だけでは勿体ないようなピアノの武藤憲夫先生にもご出演いただきました。こんなすてきな方々がさりげなく協力してくださる善巧寺ってとてもすてきですね。みなさんありがとう。

